

## 《犬桜》考

岩崎雅彦

世阿弥は『風姿花伝』第三「問答条々」の第四項で、立合能の競演において若手とベテランの役者が対戦する際、若手が勝負に勝つ場合について、その理由を説明している。

問ふ。ここに大きな不審あり。はや劫入りたる為手の、しかも名人なるに、ただ今の若為手の、立合に勝つことあり。これ不審なり。

答ふ。これこそ、さきに申しつる、三十以前の時分の花なれ。古き為手は、はや花失せて古様なる時分に、珍しき花にて勝つことあり。真実の目利きは見分くべし。さあらば、目利き・目利かずの、批判の勝負になるべきか。

さりながら様あり。五十以来まで花の失せざらんほどの為手には、いかなる若き花なりとも勝つことはあるまじ。ただこれ、よきほどの上手の花失せたるゆゑに、負くることあり。いかなる名木なりとも、花の咲かぬ時の木をや見ん。犬桜の一重なりとも、初花の色々と咲けるをや見ん。かやうの譬へを思ふ時は、一旦の花なりとも、立合に勝つは理なり。

芸の優劣を競う立合の勝負で、駆け出しの若手が経験豊富な名人に勝つことが不審であるとの問いに対して、世阿弥は若手が勝つ原因は「時分の花」(若さという一時的な魅力)であり、若手の新鮮さに観客が反応するためであると分析する。そして五十歳を過ぎても消えることのない「まことの花」を身に着けた役者には、どんなに優れた若手も勝つことはできず、それを身に着けていない役者が若手に負けるのだと説く。さらにこの三者を桜の木にたとえ、花の咲いている名木(まことの花を体得した名人)は花の咲いている犬桜(優れた若手)に勝ち、花の咲いていない名木(まことの花を身に付けておらず、魅力の低下した上手)は花の咲いている犬桜に負けると説明している(傍線部)。

この問答は、第一「年来稽古条々」の(二十四、五)の項で、若手が立合勝負で名人に勝つことを述べている部分に対する詳しい解説という形になっている。

ここで若手の役者の比喩として使われている「犬桜」の語について、これまでの世阿弥研究では十分な考察がなされていない。「まこ

との花」と「時分の花」の違いについて説明したこの記述は、「花」を主題とする『風姿花伝』の中でもきわめて重要な部分であり、ここで使われる「犬桜」の語は、世阿弥能楽論の中で重要な位置を占めると言える。

犬桜は、見栄えのしない地味な桜のことで、ここで一重の犬桜と対応させられている名木は、八重桜などの華やかな桜を指す。名木は経験豊富で多彩な技を持つ名人を、一方犬桜は経験も技も不十分な若手をたとえている。

犬桜は世阿弥以前の用例が少なく、特異な言葉と言つてよい。和歌の分野では、勅撰集にはまったく使われておらず、『新編国歌大観』によれば、二人の作者によつて、わずかに三首が詠まれているに過ぎない。

源俊頼の『散木奇歌集』には次の歌がある。

思ふ事ありけるころ、大式長実卿の  
もとへつかはしける

山かげに痩せさらばへる犬桜

追ひ放たれて引く人もなし

これは俊頼が藤原長実にあてて詠んだ歌で、木工頭を退任した俊頼が、長実の父、顕季に神祇伯への就職を依頼した頃のものかという(関根慶子氏「散木奇歌集注篇」上)。上の句は、山蔭に咲いているみすばらしい桜を痩せた犬にたとえ、犬の縁語である「吠える」を「痩せさらばへる」と掛詞にしている。下の句は、「追ひ放たれて」と「古い、花垂れて」の掛詞で、痩せ犬が追い払われ、引綱を付けて引く人もいないという意味と、花の垂れた老木の犬桜の枝を引き折る人もいないとの意味を

重ねている。そして山蔭に咲く犬桜は、大内山（内裏）の片隅で、官職に就けず不遇をかこつ俊頼自身をたとえたものであり、追い放たれた犬は官職を追われた作者を指している。この歌はこのように技巧を尽くし、犬と桜と作者自身を三重に重ねるといふきわめて複雑な構想になっている。機知諧謔を旨とする俳諧歌の名手俊頼の特徴がよく現れた歌と言えるだろう。これに対する長実の返歌は次の通りである。

春のうちは君がなげきに花咲きて

思ひ開くる折もありなん

上の句では「嘆き」と「投げ木」（薪）が掛詞で、下の句では思ひがかなって喜ぶ意の「思ひ開く」に花の縁語「開く」が含まれる。歌意は、今は職がなく不遇をお嘆きですが、寒い冬も春になれば木に花が咲くように、あなたもいずれ就職が叶って喜ぶ時が来るでしょう、という内容である。

俊頼は犬桜を官職に就けず不遇をかこっている状態のたとえとして用い、長実は花が咲いた木を、就職がかなった状態にたとえている。この二首では、犬桜と花の咲いた木が、人が置かれた状況の比喻として用いられている。『風姿花伝』では、犬桜と名木を役者の状態の比喻として使っているが、犬桜と花の咲いた木を、それぞれ人が価値の劣る状態にあることと、優れた状態にあることの比喻として使うという方法は、俊頼らの歌の方法と同一である。世阿弥がこれらの歌から、犬桜の比喻を使うことを思いついた可能性は高いと

考えられる。ただし、歌では二者の単純な対比であるのに対し、世阿弥はこれを、三者の複雑な比較に発展させている。

『風姿花伝』には、先に引用した部分に次いで、能を観客に面白く見せることが必要であることを説き、次のように述べている。

されば主の心には、随分花ありと思へども、人の目に見ゆるる公案なからんは、田舎の花・藪梅などの、いたづらに咲き句はんがごとし。

面白く見せる工夫をしないのは、田舎の花や野生の梅が人目に付かない場所で咲き誇っているようなものだとしている。犬桜が山蔭で人に顧みられることなく咲いているという俊頼の歌は、世阿弥がこの比喻表現を用いる際に、一つのきっかけになった可能性もある。藤原為忠の『為忠家後度百首』に「野径桜」の題で、次の歌がある。

み狩りする野辺の霞の絶え間より

まだらに見ゆる犬桜かな

「狩り」「まだら」は犬の縁語である。また「山寺桜」の題で次の歌が載る。

山がつの小寺に咲ける犬桜

花の数とは思ほえぬかな  
ここでは「思ほえぬ」に「吠えぬ」が掛けられている。

寛正六年（一四六五）に観世が演じた能「三山」では、シテの桂子がツレの桜子を打つ場面

に次のようにある。  
打ども去らぬは家の犬桜、花に伏して吠え叫び、悩み乱るる花心

桂子は桜子を、犬桜の語を介し、犬にたとえて賤しめる。

俳諧では犬桜を詠んだ句は多い。『竹馬狂吟集』に

折る人の手に喰らひつけ犬桜

『守武千句』に

木末よりさてこそ吠ゆれ犬桜

の句が載る。また松永貞徳の『俳諧御傘』には、俊頼の歌を引用し、次のように考察する。

如此あれば、俳言にはあらざるべけれ共、連哥に終に聞かざる物なれば、俳言に成るべし。

犬桜は和歌には用例があるが、連歌にはなく、俳諧の用語として定着したとする。犬桜は言葉遊びを重んじる貞門俳諧で好んで用いられた。貞門の影響下にあった若き日の芭蕉も「貝おほひ」で、正之の

きやん伽羅の香ににほへかし犬桜

を評して、

手さはりもむくく犬の尾もしろき

と洒落ている。また芭蕉自身も

風吹けば尾細うなるや犬桜

の一句を残している。

歌舞伎の「助六」では、揚巻に横恋慕するくわんべら門兵衛が

お美しい揚巻といふ楊貴妃桜に、迷ふ煩悩の犬桜、どふで叶はぬ恋ならばと、「通小町」の深草の少将よろしく、自らを犬桜にたとえている。

（國學院大學非常勤講師）